「干渉」ではなく「手助け」を

小野市立小野中学校　九年　松田　祐子

躍動感。その写真には、この言葉がよく似合うと思った。床を踏む足からはタンゴのリズムが、服のしわからは激しさが伝わってくるようだった。そこには、ダンスをする一人の男性が写っていた。その人こそ、私のおじだ。

私が初めておじに会ったのは2歳のとき。そのときからおじは、つえなしでは動くことができなかった。二十年前に遭った事故が原因だ。もともとは大会で何度も優勝するようなダンサーであったおじだが、今はダンスをすることはおろか、目の前にあるテーブルの上のお水を取ることも、本を読むことも難しい。私はそんなおじの助けになりたいと思っている。お水が取りづらいなら手が届くところに渡してあげたいし、本が読みづらいなら、ページを開くお手伝いをしたい。けれどおじは「自分でするよ」と言って、大変そうにしながらも自分一人でしようとする。

また、今のおじの職業はダンス教室の取締役だ。大好きだったのにやめるしかなかったダンス。叶えたかった夢を諦めることしかできない自分自身の体。その教室に来るのは、健全な体をもったダンスをすることができる人たちだ。おじが諦めなければいけなかった夢を、叶えられる可能性をもった人たちなのだ。そのような人たちの近くにいることが、おじはつらくないのだろうか。私だったらたえられない。その人たちを見ていることさえつらい。けれどおじは毎日楽しそうに仕事へ向かう。私とおじの間には、一枚の見えない壁があるようだった。私といるときにだけ作られる、おじが作った壁が。私にとっておじは不思議な人だった。

ある日、おじとおばと一緒に食事に行ったとき、おじがコップを取りづらそうにしていた。私は手助けをしようと思ったけれど、おじとの間に壁を感じていたため、行動に移すことはできなかった。おばが助けてくれるだろうと思い、おじを見つめていたがおばが手助けをすることはなかった。私は冷たいと思った。障害により取りづらいと知っているのに。抗議する気持ちでおばを見ると、おばもおじを見つめていた。おじがコップを自分で取ると安心したように食事を再開した。そのときのおばの目は、とても優しかった。そしてとても温かかった。おばは冷たいどころか、おじをいつでも手助けできるよう見守っていたのだ。おじとの間にある壁。それはおじが作っていたわけではなく、私が作っていたのだ。障害があるからと全てができないわけでは決してない。自分でできることだってたくさんある。それなのに私は、障害があるからという自分勝手なイメージで

、必要以上の手助けをしていた。そしてその手助けは、手助けとは呼べないのではないだろうか。それは干渉だ。私は知らず知らずのうちに干渉をし、おじを傷つけていたのだ。

おじのような障害がある方が一番嫌なのは、「障害者」という勝手なイメージを押しつけられることだ。障害者だからできないことが多いだろう。障害者だから夢を諦めなくてはならなかった。だからつらいはずだろう。このような押しつけが障害のある方の妨げとなる。おじが自分で物事を行おうとするのも、毎日楽しそうに仕事に向かうのも、周りの人たちのおかげだ。ダンサー時代はダンスのパートナーとして。今は一生を共にするパートナーとして，おばはおじのそばにいる。ライバルだった人は、今は次の世代を育てる良き仲間としておじの周りにいてくれている。いろいろな人が形を変えながらも、おじの周りで接してくれている。手助けをしてくれているのだ。

おじの今の夢は、自分のダンス教室に通ってくれている人たちの夢がかなうことだそうだ。周りの人たちが形を変えながらも自分のそばにいてくれたことで、夢の形も変えられることに気づいた。そううれしそうに話してくれた。そのときのおじの顔を今でもよく覚えている。障害者だからといった勝手なイメージを拭い去った世界はとても美しかった。その美しい世界をいろいろな人に見てほしい。今の社会は公共施設にユニバーサルデザインが使用され、障害がある方にも住みやすいものだ。また、自分一人では手助けできないと思っていた人たちが、障害がある人の手助けを、気軽に行うことができる。そんな社会だ。けれど、それは果たして「手助け」なのか。一度考えてみてほしい。自分勝手なイメージの押しつけは障害がある方の負担となるだけだ。「干渉」ではなく「手助け」をする。そんな風に、一歩下がるだけで見える世界の美しさを、尊さを私はたくさんの人に伝えたい。それが私にできることだから。教えてもらった私だからこそできることだから。